

長野市内のチャンチン（センダン科）の生育とその利用について

中村 千賀*

比較的古い時代に渡来しているが、あまり馴染みのない樹種にチャンチン *Toona sinensis* (A.Juss.) M.Roem. があげられる。長野市内の芋井地区ではこの木が集落内の随所で植栽され、最近まで生活に利用されていたことがわかったので、その利用方法や市内で確認された生育状況について報告する。

チャンチンは中国北・中部原産のセンダン科の落葉高木である。幹はまっすぐで、高さ 30 m、胸高直径 80cm に達する（北村・村田 1971）。葉は奇数または偶数羽状複葉で小葉は 5～11 対、ニワウルシ *Ailanthus altissima* (Mill.) Swingle（ニガキ科）に似るが、縦に裂ける樹皮が異なる。花期は 6～7 月で、円錐花序に多数の白い花をつける。蒴果は 5 つに裂開し翼をつけた種子を散布する。名前は中国名の「香椿」の中国音「ひゃんちん」から転じたものとされる。赤みを帯びた新芽（写真 1）は香りが強く中国では山菜として好まれている。中国では香椿、椿がチャンチンを指すことに対し、臭椿、樗はニワウルシを指し、両者は古くから対のものと認識されている（寺井 2016）。

日本への渡来は、1431 年以前に成立した「尺素往来」に記載があることから、室町時代に遡るとされる（北村・村田 1971、磯野 2009）。奈良県吉野町の古刹、金峯山寺の現在の本堂（蔵王堂：1592 年建立、国宝、高さ 34 m）の柱に利用されており、伝来の古さを示す。1661 年創建の京都府宇治の黄檗山萬福寺では、中国僧の隠元隆琦によって種子が持ち込まれ植えられたと伝わり（牧野 1932）、また同寺が提供する普茶料理に、チャンチンの新芽が使われている。日本の木彫仏像の材料やその変遷を広く研究した小原二郎によれば、中国の唐時代にジャクダンの代用にチャンチンが使われ、日本で同じ香木のクスノキの利用につながったという（小原 1984）。これらのことから、チャンチンの日本への伝来には、中国文化や仏教の影響が強かったと言えるだろう。現在、鳥取県や富山県、静岡県、長野県大桑村などの寺社でチャンチンの古木が知られている。

日本では江戸時代には用材として知られていたよ

うで、1874 年（明治 7）に博物会事務局が発行した「有用木材捷覧初編」では、国内の有用材 100 種のうちの 1 種に掲載され、産地は丹後、丹波、但馬であり、器材であると記されている（博物会事務局 1874）。また、1903 年（明治 36）大日本山林会発行の「大日本有用樹木効用編」では、材は堅く家具や器具の加工に適すると記されている（諸戸 1903）。現在、赤褐色の特徴的な材は、家具や建築材、また三味線の胴などに利用されている（長沢 2012）が、流通量はそれほど多くなく、チャンチンの名は一般にはあまり知られていない。赤い新芽の美しさから公園や街路樹として植栽されることもある。

各都道府県の植物誌などの記載から野生化が確認できたのは、富山県（逸出野生化、稲架や味噌だる用に植栽、大田ら 1983）、長崎県（植栽・野生化、外山 1980）、鹿児島県（植栽・野生化、自家用材・防風林に利用、重松 1952）で多くはない。県内では、長野県植物誌（1997）には記載がないものの、信濃植物誌（横内 1983）には下水内・上水内・下高井・長野・更埴・下伊那に分布、逸出・帰化とされている。また、長野県植物目録（2017 年版）（長野県植物目録編纂委員会 2017）では、千曲市で逸出とある。長野県環境保全研究所には、これに該当する千曲市での採集標本（No.160903）の他、長野市浅川（No.141700）、長野市芋井（No.152789）の標本が収蔵されている。また同所の調査で中条村（現長野市）での帰化が確認されている（長野県環境保全研究所 2006）。これら長野市内での記録はいずれも長野盆地の西縁の農村地域である。

2019 年 4 月から 12 月にかけて、長野市西部の裾花川沿い（西長野、新諏訪、茂菅、平芝と芋井地区）でチャンチンの生育や利用について調査を行った（図 1）。その結果、大きな群落は長野県庁の近く、裾花川沿いの旭山（標高 785 m）と頼朝山（638 m）のふもとで確認できた。以降、旭山の群落を群落 A、頼朝山の群落を群落 B とする。群落 A は 100 m × 30 m ほどの広さで胸高直径 30cm 以上のチャンチンが約 40 本生育する（写真 2）。一部の林床はカタクリ自生地で、歩道が整備されている。前年の倒木 2 本を計測したところ、それぞれ胸高直径約 40cm

* 長野市立博物館・隠地質化石博物館

〒381-4104 長野県長野市戸隠橋原 3400



図 1. 調査地域とチャンチンの群落の位置.

と 35cm、高さ約 27 m と 26 m だった。群落 B は沢を挟んで両岸の 100 m × 50 m ほどの範囲に、胸高直径 30cm 以上の成木が約 30 本生育する。いずれの群落も太いものは直径 50cm を超えるものもある。群落 B より沢の上流では、ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino やオニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Komatsu) Kitam. に交じって大小のチャンチンが混生する。近くの裾花川に面する急傾斜地にも、4、5 本ずつパッチ上に点在している。

群落 B に近い芋井地区や茂菅では、人家の近くや水田や畑の畔、スギ林の一角などにチャンチンが単独で、または 4 ～ 10 本ほどまとまって植えられているのが見られた。またこの地区では沢沿いを中心に野生化したものが多数見られた。芋井公民館を通じて地元のかたにチャンチンについてうかがうと、80 代の年配のかたはチャンチンの名で認識しており、昔からあったもので、以前は薪に用いていたという。幹がまっすぐで縦に割れやすい特徴をいかしたものだと思われる。また、家を新築した際に土台の材として用いたとの話も聞かれた。ただしそれより若い世代では、特徴的な蒴果（写真 3）に見覚えがあるというかたもいたが、名前を認識されているかたはほとんどいなかった。また、家の近くで大きく育ち邪魔な木だとされるかたもいた。

飯山市北部の豊田地区でも農村集落内で植栽が見られたので参考に記す。カキノキやケヤキと交じって数本、また人家の隣に直径約 45cm の独立木、水路沿いに数本の幼木といったように、大小様々な木が見られた。同地区では以前は生きた木を田の畔に植えて稲架用の縦棒に使っており（高橋 2004）、

やはりまっすぐに伸びる特徴をいかしたものであると言える。この地域では「りょうがん」と呼び、「竜眼」が転じたものと考えられるが、はっきりとした由来は不明である（高橋勸氏より）。同名のムクロジ科の常緑樹リュウガン *Dimocarpus longan* Lour. は、チャンチンと同じく複葉であり、伝来時に混同されたとも推測される。また、飯山市南部の秋津地区でも同様に稲架用に利用されていたが、高木になることに由来する「くもやぶり」、「かみなりよけ」などと呼ばれるという（丸山 1995）。

チャンチンは地下の根から多数の萌芽を出す、群落内ではその多くは成長できずに枯れていた（写真 4）。種子も多く作るが、全国的に野生化の記録が少ないことから、発芽・定着は稀であると考えられる。この点は広く種子散布し県内で野生化が進行しているニワウルシとは対照的である。上記の芋井地区のかたの話によると、大きく成長して邪魔になった木を切ったところに、すぐに別の木が伸び出したというが、おそらく根萌芽由来と思われる。また今回の長野市内の調査から野生化は沢沿いや崩壊しやすい斜面で主に見られた。植栽木からの萌芽の移動によって考えられるが、あるいは光環境や水分条件によっては、種子による分散からの発芽・定着がおこる可能性もある。今後、発芽実験を行ってみたい。

旭山、頼朝山の 2 か所のチャンチンが優占する林分は、どのような由来によるものか今のところわからない。ただ、旭山と大峰山（この 2 つの山の中間に頼朝山が位置する）が江戸時代には善光寺の寺領だった（長野市誌編さん委員会 2001）ことから、チャンチンの長野地域への伝来や植栽には寺院



写真1. チャンチンの芽吹き。
赤みを帯びる。



写真2. 群落A（長野市旭山）のようす（2019年5月9日撮影）。
チャンチンは芽吹きが遅く目立つ。



写真3. 蒴果は果序ごと落下する。



写真4. 成木の周囲には根からの萌芽が密生する。

の影響があった可能性も考えられる。

チャンチンは農村地域の生活の中で利用されてきた樹種であり、もともとは選んで植栽されたのであろうが、生活スタイルの変化から現在忘れられた存在になっている。一方林業分野では、チャンチンは成長が早く根萌芽による育苗も用意であり、材は加工性がよく家具や建具などにも利用可能であることから、国産の早生樹種の1種として注目されている（全国天然木化粧合単板工業協同組合連合会編2015）。興味深い樹種なので今後も由来や利用、生活史など調べていきたいと考えている。

芋井地区での聞き取りには芋井公民館の小林公子館長に大変お世話になった。また飯山市の高橋勸氏、長野県環境保全研究所の柳澤裕哉氏には資料を提供

していただいた。深く感謝申し上げます。

引用文献

- 磯野直秀（2009）資料別・草木名初見リスト．慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 45：69-94
大田弘・小路登一・長井真隆（1983）富山県植物誌．廣文堂
北村四郎・村田源（1971）原色日本植物図鑑・木本1．株式会社保育社
小原二郎（1984）日本人と木の文化．朝日新聞社
重松義則（1952）南九州の香椿樹，山林 823：14-18
高橋勸（2004）山野の植物と人の生活—古家を解

- 体して思うー，笹本正治監修・飯山市編集，山の恵みー奥信濃飯山の自然と文化ー，ほおずき書籍株式会社
- 寺井泰明（2016）植物の和名・漢名と伝統文化，株式会社日本評論社
- 外山三郎（1980）長崎県植物誌 1980，長崎県生物学会
- 長沢武（2012）野外植物民俗事苑，ほおずき書籍株式会社
- 長野県環境保全研究所編（2006）研究プロジェクト成果報告 5 信州の里山の特性把握と環境保全のために，長野県環境保全研究所
- 長野県植物目録編纂委員会編（2017）長野県植物目録（2017 年版），長野県植物目録編纂委員会
- 長野市誌編さん委員会（2001）長野市誌第三巻近世一，長野市
- 博物会事務局編（1874）有用木材捷覧初編，博物会事務局
- 牧野富太郎（1932）ちゃんちんハ日本ノ樹ナラズ，植物研究雑誌 8: 341-347
- 全国天然木化粧合単板工業協同組合連合会編（2015）未利用広葉樹の新規需要開拓に関する調査委託事業報告書，全国天然木化粧合単板工業協同組合連合会
- 丸山利雄（1995）飯山市秋津地区の寺社叢樹木考，高井 110:1-8
- 諸戸北郎（1903）大日本有用樹木効用編，大日本山林会
- 横内斎（1983）信濃植物誌，銀河書房